

らんしや

澤間  
静吉

共鳴に軋む二段ベッドの下で盤石の基礎に伴走のフレームがけんしんという重荷を背負うわけでもなく、

天蓋代わりになった装飾の上段に層状の燭台に立てられていぶられる炎が下段に滴り落ちる蠟の、

固まってしまった兵隊の格好をした蠟人形と同乗した労働と人情と形状の歯車がかみ合う乳母車に乗せられて、

押すこともない引くこともない守りきることもない攻めきることもない上段の繁栄に浮かれて、

とつかえひつかえ高価なお気に入りのマットレスを変えさせた。

金切り鋸の金切り声は惰眠の子守歌。

一脚ごとにひき切るのではなく同じ力で同じ回数で四力所の脚を少しずつ上段を切り離しにかかるわけもないと、

知らぬふりに知ったかぶりの同乗のよしみにフレームにかけて濡れタオルに足を乗せて上段へ上がってしまったけんしんの、

傍若無人な態度に呆れかえったよしみの忠告が何度も繰り返されようとも洗濯機に放り込んでしまつて、

洗い流された足跡が泥を塗られたような顔をふき取ってしまったタオルであつてよしみは、

上段に向かつてそのタオルを投げた。

埋もれるほどのタオルを体に巻き付けて死に体であるけんしんは低反発のマットレスの上をのたうち回る。

無利益の回送に理想の益金が利権の増益に加担して息詰まる空気清浄機のモーター音が常に働いて、

空調の空転に全面広告の気配がでかかど観光旅行の平面図に足を運ばせて国境線を越えて、

シャツターの射程に風景や人物の遺跡や民族を感光させて凱旋するよしみのアルバムに閉じられた時間旅行の気球が結わえられた虚空を、

埋め尽くして地に足着かぬ寝台を浮かせて上空高く持ち上がる。

気配にも自らの手で手を休めることもなく金切り鋸で断ち切ろうとする下段のよしみの優柔不断な、

労力の惰性に落下するだけのシングルベッドが地に落ちて破壊されるまで間に貸し付けられたあてどない富裕層の、

気球をこれまたなにげなく無鉄砲に狙い打ち落とそうとした。

お前が悪いんだと言われたお前が守る演習場の円形脱毛に円高の啓蒙を複写した未来図は、

非日常の隊舎を俯瞰する個営の孤影を護衛する模造紙に書かれたサービス残業のモットーが、

もつともな日常の突撃に慌てふためく気配すらない。

どの時計であれ花時計であれ日時計であれ水時計であれ腕時計であれ電波時計であれしんやは、

繰り返し心中を察する容赦情けない射程の不穏な気配にしようへいは何物も手に入れてしまったであろう調停の役者に毒づくこともあつて、

バックミラー越しの移動し続けねばならぬ目的地へたどり着かねばならぬ運転中でありながら、

女装を演じることはあるまいと息巻いた。

県道国道高速道畦道邪道私道王道正道行動。

堂々巡りの道草を食うご馳走を目当てに腹も空いたかどうかもわからぬ行列の最後尾に並んでみて、進んでゆく行列ばかりが後から後からなだれ込んで詰め寄ってばかりの言いがかりに待ちくたびれることもない。

見え透いた結果に満足げに逃げ口から入った逃げ口を出て行く逃げ場から逃げ場へと花開く花壇に、

日の射すところの水溢れるところの腕の中に独り占めにした共有の電波は寸分違わぬ世界時計の、

年表を記憶した単語帳の年号の裏で言い当てられた記憶だけを信頼して眠れる史実の冬眠を妨げる。

序奏の高揚と期待に胸を膨らませブラで寄せて持

ち上げたつもり鳩胸が扁平の大地に胸をなで下ろす。

滞った脂肪をひつくるめてもくびれるはずもない欠けた内蔵の付け入る隙もない胎内の目覚めだけをうろ覚えにして、

はちきれんばかりの臀部を引き締めたところでまろやかな曲面を描くこともない本能の突起が、

ぶら下がりのウインカーのようにあちこちを点滅しては無用の直線をひた走る。

無知なる鞭を打ってあかりの上から頭髮下から体毛をむしり取って毛むくじやらの野獣と化した。

奪えるものなら奪ってしまいたい略奪の遍歴にほとぼりが冷めた頃、複写の渋滞にはまる車体の服従に我慢ならぬ肉感の、

忙殺に流弾の雑録の防弾ガラスを跳ね返しては透明感に額をぶつけてしまっってはうつかりしていたなどど、

見て見ぬ振りのしょうへいのスカートをまくり上げ体毛に隠蔽された突起の痙攣は長続きはしないしんやの、

先端に不発弾が詰まったまま砲台を粘膜で偽装した。

死を受け入れる誕生の被弾が空砲のまま擬音の天空へ向けた威嚇の出発の合図でしかなかった闘争

本能の、

女装に母性の迷彩服を着せられた鉄兜の父性の薄毛を隠した。

剥げ、

殻を剥げ、

薄くなってきた卵殻から白みはじめたあかりがかいま見れた。

記憶した幾度とも折り曲げられた作戦図を一面一面広げて発想が次々と繰り広げられることもなく、

繰り寄せた苦慮の小銃を袈裟懸けにして小隊に続けとばかりに記号と数字で書かれた紙の演習場を進撃する遠心の象形は、

ゆりかごに詰めるだけの詰め込んだ商品に払えるだけ払った金銭と踏みつけるだけ踏みつぶしたアクセルと、

回せるだけ回したハンドルと知るだけ知った情報で出来る限り距離を稼いで時間をつぶし合って、

迷路に紛れ込んでしまったとも言えずに出口から見た入り口を盛んに気にかけるばかりで、

閉塞の進捗に促進の併読に側壁の新道が分かれ道となつて進みたい方向には向かわせてくれているようにうでいて、

字形の日が短くなるにつれ月が差し込むにつれ山

が泣くにつれ川明かりが降り出した雨空の、

源に外皮を被った不安な空模様が不空の暗流に渦巻き雨合羽を着ても汗に濡れてしまった脱水状態の、瑞祥の脱退に水沢の小隊が濡れそぼつ。

傘を置き忘れることがあっても傘を差し掛けることもないがこれ以上濡れ鼠になることもなからうと、即応の両腕にかかった実績も経験もない実景の席卷に実権の形跡すらない演習場を攻め立て、

雨音の尋常ではない集音マイクが拾った雨粒の焼夷弾が映像とは異なる火炎や高熱を消し去る濁流となつて、

作戦図にはなかつた川筋を付け加え半長靴から下半身から進軍にあらがって行く手を阻もうとして、

品薄になったシナモンに似た臭気が鼻についたかと思うと水かさはすでに今までなかつた筋道を立て、膝頭の上を越え困難な足取りを奪いかける。

流失するものなどないと思われた急場の上流から押し流されてくる学校や企業や庁舎や持ち家の、

演習場がそれでも隊列を乱すことなく行軍を強いられた折り目の川を遡上する魚卵の分散に足の踏み場もない逃亡の、

多趣味が先頭の濁流を回避せよと命じられた。

小隊長は一目散に手引書にならつて中州に退避して援軍など来ることもない無線にどうしたらよいの

かわからないなどと言えるはずもなく、

いくら発信しても返信のない濁流を分かつ大岩の飲み込まれそうになりながら飲み込まれそうにない堰止めの、

庇護にも雨足は弱まることを知らずに矢継ぎ早の棒状の雨滴に等身大の脅威に耐えかねて叫ぶ。

雨が恐ろしい。

堰を切る白羽川の氾濫に瞬く間に車輪は浮き始め波乱の白帆を翻すしんやの大麻の幻覚に過ぎないと、

雨滴を寄せ付けぬボンネットとか跳ね返す屋根とか混ぜっ返す車輪とか視界をぬぐい取ってしまうワイパーの、

ワイプに漂流する車体などあり得ない水流に流され出した無能の内燃機関は浮かばれぬ無念の脳幹の梗塞に不自由の、

しょうへいは蹴破れぬ扉に開けられぬ窓に覚悟を決めたかのように入水する下半身に目線に浮かび上がってくるコンパクトで、

死化粧の白粉を塗りたくった鏡に別れを告げてびしょぬれのウィッグを被り直した。

しんやは常夜灯の闇を模倣した取り替えることの出来るあかりを抱きすくめ日進月歩に長期化の様相を呈した公共の鼓笛隊のコメントに困惑した打楽器



が、

カスタネット、シンバル、トライアングルの手の内の二枚貝を皿型のような両手を糸でつるされた正三角形に折り曲げられた音律を持たぬ手やばちで打ち振り鳴らされた伴奏に管楽器が、

吹き口から管に息を吹き込んで空気を振動させる吹奏の息継ぎに順応した騒音と音楽の境界に、

読み取れなくなった草仮名の揮毫に走らせる趨勢に尽きた墨や絵の具がにじみ出る色彩と特色の色あせる脱色の、

脱出に子宮の天使が視点の九死に一生を得る飛翔する。

死に目にかすった同調の三角地帯に取り残されたしんやのあかりはしようへいを見捨て消えたあかりを手放して、

運転席を独り占めしただけの思い上がった内燃機関の吸気と爆発の起爆剤はもはや後塵を拝し、

未知の車窓を遮った未曾有の地象の反撃に地表の衝撃波がしんやを飲み込んで幻覚の遠出に格闘の現出を見出された。

兵役の完遂に振り込まれた現生の補給に生母の原級が最上であるよりも比較するよりも慕わしい孤軍奮闘の、

意気地を奪還せよと生き馬の目をくり抜く役柄を

重んじて先陣を切る怒濤の白羽川に刃向かって、

待ったなしの末端の折り目を返した作戦図を反古にして心機一転の神韻に起点として印された。

一人芝居の平和が違和の芝生を枯らし異色の鷲鼻でかぎ取ったしんやの気配に孤独を知らぬ擬古のパインナップルが、

橙黄色に熟された多汁で甘く香りが高い果実の抽象に短い幹に密生して剣状で厚い葉でもって、

カットインするサバイバルナイフが切り込んだ果実の原形をとどめない完成の具象を平らげるだけの、  
だからだと唇から垂れる果汁の酸味もぬぐい去った作戦図を想像することすら出来なくなつた。

止みそうにない雨がそのような演習場の変貌に攻防の跡形もない不戦の礎が小隊を現し待機状態の、  
小銃の銃口にも雨垂れが素になつて冷たくなつて錆び付いてまとわりついて寒気を覚え始めた震える銃身を向けるクレーを破碎した標的の数を競つても、

虚空を駆ける天井川の支流に堆積する河原の星屑が瞬くこともなく打ち落とされただけの流されてきただけの淀んだ河床の、

踏みしめることもないすくい取ることもない深層の散弾が標的の散乱をかくまつて深みを測るだけで、

軍靴の浮かんだ素足であることを忘れごつごつと都合のよい足の裏を刺激する。

愚者であるけんしんの半身の武装に肩すかしの稲光が刹那の裂け目を縫い十分な間を取った雷鳴がごろごろと喉を鳴らし、

結実の雨粒を嘔吐した天空の口唇は感光の内容物をすべて吐き出すまで時間を費やしては、

悶え苦しみ時空の反面に手を突いてかがんでひと思いに希釈の偶像をかたどった。

信仰の行進は身心の口腔を貫いた丸腰で腰まで浸水した足取りもおぼつかない進行の定着に膠着した心底の、

足踏みが震動する紙相撲の小隊を動かして至近戦に押し問答の土俵の上で軽はずみな指先の行司が、

土俵をはみ出すもの土俵に倒れるものばかりを司つて同じような半身を折り曲げただけの、

不戦の力士を取り組ませて砂被ることもなくしこ名を叫び型紙の勝者を讃えるだけで燃えさしの、

小隊に戦火のくすぶりが燻製の腸詰めにも両端を括られて立ち往生した。

が、雨足は嘘のように一気呵成に退散したかと思ふと氾濫したわけでもない天井川の川霧が立ちこめて、

小隊の目的をも見失いかけたが武装の半身が前面

に出て進行するしかない仮想的な表題の、

旗印に向けて不可解な演習場をかき分け踏みしめ  
最後尾のけんしんが未来の撮影に多くは語らぬ後ろ  
姿の、

過去の籠抜けにある裏口になどたどり着けること  
はない。

小隊以外は正体もない草木も眠るといふ演習場の  
自然に対抗するわけでもない座り込んで仮眠するけん  
しんの、

苦汁をなめる舌先三寸の口撃に動かぬ標的には興味  
を示さず動き出した標的ばかりを追っかけて、

勝ち名乗りを上げた富裕の天井川が不意の遊蕩に  
不当の威容を誇らしげにしたところで流される川面  
の、

鏡面にうつむいた消化しきれない優越の改竄が越  
境の有産に書き換えられた額面の額縁にはめ込まれ  
た土俵の上で、

手刀を切る中央と右と左と、

イエスマたはいえの対等の選択に迫られるだけ  
の背中合わせの柔軟性を高めるしかない。

最高と言っては最低をあしらい最低と言っては最  
高を知らしめた再考の平和は公平の才腕をふるった  
申し分のない亡者の、

固有名詞の二本の指をかけた引き金に三本も必要もない一本に絞ることもない一本締めも三本締めも、二本撮りのクランクアップに駆けつけた祝宴の乾杯に円環の祝杯を上げる完熟な縁は否もの味なもの、生者と亡者としゃしゃり出た洒々落々の色恋沙汰に色濃く撮影された再現のしんやが花束を頂いて、

言葉に飢えた脇差しの小刀細工に酔いしれた元の鞘に収まる刀の片仮名のカタナが峰打ちを繰り返し、二本差しであることを忘れさせてしまった。

鬪魂の武士道に混同の東風が御馳走様と吹き抜けて自給する気もない総菜を陳列させて越境から敗走する食い扶持を賄う高慢な、

物貰いが帰還する外貨の算段に人件費の高騰が見当の人口に降りかかるがま口を閉じることもない開けっ放しの、

すれっからしのだらしない口唇を舌なめずりして多数の個人が集結することもない多数決の孤独を好み、

未決の家族を養い血族の身から出た錆を磨き上げた。

負荷からは始められぬ付加価値でしかない孵化を待ちきれずに投げつけられた生卵がぶち当たる体面の、

不戦勝が卵白の乱反射と卵黄の嵐気に勢いづいた溶き卵を半熟状にいり上げ金に困れば太刀打ちできなくなると思いきんだ裕福な奴隷が、

調理された目玉焼きを裏返しもせず身の程知らずの焦げ目をより分けて手早く加工品の乾燥した冷凍された完成の残飯を売り飛ばし、

咀嚼も分泌も消化も鈍らせて排泄だけをひた隠しにした個室の充足に姑息な湿潤の固執した俗臭の、鼻で笑うへそを曲げたへそくりが偏見と高慢に偏向した金満にそっくり返った。

外見の貧富に惑わされて才色兼備な外皮をあてがわれた不利益な思想を公開する理想を放り投げる手榴弾が、

抗争を乖離する爽快な功利を握らせて手放せぬ安全ピンを曲げて引き抜けぬようにしてきた知と血と痴と塵と、

雨干上がる演習場のけんしんに地勢の想起に世紀の地層が層状の知性を崩さぬままに背もたれ休息の兵隊に血気に逸る地上の痴情にたぶらかされて、

しんやはけんしんのそばまでやってきて小銃に弾丸を装填する贗造の弾道を描いて童顔の、

けんしんにもう撮影は終わったのだから塵芥すらない演習場を攻撃することもないのだからと、

保身の迷彩服を信服の褒め殺しに台無しにされた

のだから野心の鉄兜で森閑に八つ当たりしたところ  
で、

反撃のない木霊は沈黙の戦争に鎮静の黙想を続け  
ているだけなのだから使い捨ての行進が、

瓦礫の上で固められた徒労の軌跡を明らかにする  
ことはないのだ。

時の狼藉を働く情報の空砲にひざまずく欲望のは  
け口が豊沃よりも食う方が忙しい工作の演習場には、  
早くたどり着くことなど意味のないことでも例え  
遠回りしたとてさらに絶無の回覧に無理算段の絶海  
の孤島が、

無産の離脱に絶好の快刀を振るうしんやは撮り終  
えた映画の編集を行うこともない光と影と色と音と、

一昨日から義母が祝福する婚約の一報を受けたメ  
イルが返答の逃亡に同盟を組んで健やかなるときも  
病めるときも喜びのときも悲しみのときも富めると  
きも、

貧しいときも命ある限り真心を尽くすことを誓う  
前に現れた。

これを愛しこれを敬いこれを慰めこれを助けるこ  
とがあつたか。

助けを求めるばかりで助けられてばかりでけんし

んは演出の経済の冤罪に出撃する演劇の、  
再出発に劇作の撃砕に延発の軍靴に乗せられて発  
狂の嚙下に発煙の胸懐にむせぶ。

石ころが地雷であるはずもない天変地異が敵襲で  
あるはずもない藪が鉄条網であるはずもない、

他人が軍人であるはずもない端末が小銃であるはず  
もないはやりの衣装が迷彩服でもない、

空を翔る鳥がミサイルでもない殴打が弾丸でもな  
い戦車がブルドーザーでもないプルトニウが芳香剤  
でもない放射線が作戦図でもない神話の、

演習場に諍いを起こす武器を捨てた素浪人がのろ  
い動作や反応で同化の錯誤に加護の同罪をあがなう。  
神仏習合の和平に新兵が号令に四本足の回虫うご  
めく心中の本懐に四海の円周上に忠僕の、

集中する煙幕で逃げおおせた車輪の回転で社会の  
輪転の海流の射的で空気銃にコルクの弾丸を詰め込  
んで、

人形やおもちゃや壁を撃つ遊びが打ち落とした景  
品を与えられる外的な真剣勝負に小銭を落としてま  
で、

身を乗り出して出来るだけ標的に近づきながらも  
跳ね返した壁紙の素浪人の平穩無事な御身の平時は、  
確かに生きながらえた降順の年表をたどる。

後年への準備が生殖の謀反に成否の属目だけの防



戦一方で昇順の年号を変えた史実で迎え撃とうとも、居並ぶ景品の広くも高くもならぬ飾り棚に隙間もないくらいに陳列された射的に整列した精霊の、

順番待ちの誕生が空気銃を増産させてコルクを消費させてもなかなか打ち落とされそうもない一つの影となつて、

景品のスペクトルにたじろぎながら慟哭のうめきに圧倒されるその場の雰囲気にしんやの熱演が、悪夢となつて蘇る。

たすき掛けの小銃を銃口を先方に向けながら安全装置をかけたまま引き金に人差し指を当て、

最前線と言われる反撃のない善戦空しく敗れることもない情況に不戦の父性が一丸と成らざるを得ない戦果の、

小隊は無法地帯の剣呑に威嚇した懸隔の呑気にノンストップの利潤に武装した理想の純分を計り間違えて、

専断の応量器に溢れるほどの安泰にひびが入ることもない押し黙った暗澹の底を見ることもなくなつた演習場に展開する底なしの、

得意客の反動におもねる射撃場の舞台装置に似た模造紙に書いた標的を昇降する装置が標的に穴を開けた数と位置と、

ひかえた得点と新しい標的を重ねて張り付け分厚  
くなつた貫通の弾丸を通観する歓談する。

見送る上昇の天敵に葉莢をばらまいて地下の兵隊  
がまとめる射撃の監的にうなずきながら、

下降の隠蔽にかしづくけんしんの苦に、あつて俗  
にない民の原子核に覆われた屋内の射撃場は、

地下茎に蔓延つて発砲の双眼鏡をのぞく上官の支  
配下に埋もれる。

アタリモシナイタマヲムダヅカイシヤガツテナン  
ノヤクニモタタナイデクノボウガ。

語気を荒げてしごきの鉄拳が振り上げられた自由  
の敵がカメラアングルをしゃくりあげ背後の、

緊迫する気配に禁忌を発揮させた振り向きざまの  
銃身をよじらせて引き金となる激高の瞬発力に激発  
の高周波が独り舞台にうねり、

連鎖的に分散させて実弾を絞り出す口も利けぬ銃  
口の口唇を大っぴらに広げてまくし立てた。

針葉樹に向けて太陽に向けて岩石に向けて山海に  
向けて孤島の無記名の気候や環境や記憶や日記や、

整合性の策略に観客の銃声が慣性の拡充に成熟の  
感覚を失わせて正確な宿願に思いを馳せさせて、

改行の散弾に仰山な階段に積み寄せて逃げまどう  
出口である世界のネットにからめ取られた放射状の、  
輻輳が繭玉のようにぶら下がって貯えられた獲物

の虎の威を借りたいつまでも滞納され続けた商品に向けて、

能弁の対象として濃淡の弁証を塗りつぶしてまでも単弁の脳髓が堪能する変成に達したけんしんの、

開花が冥利の劇薬を注意書きすら読みこなせぬ劇中の特効薬を飲み下し発砲、発砲、八方に、

省みることもない現状把握に困難な幻惑に商売気すら結論からの反撃もない収支の決算が、

傑作の終結の試算を巡らせる四散の兵隊であれ市民であれ斃死のタイミングにこめられた弾倉の、

しんやに代演の鬼気迫る反動と反響の同伴と共犯の創作に関わる威嚇と命中の犠牲を払う上官の、

こめかみにこんなはずではなかった訓練の成果が貫通する事もなく止まった。

ひとりひとり狂気の退行が強行せざるを得ない危殆に瀕する鈍ずる射撃場をはみ出させて、

誘導の四輪駆動を乗っ取って運転操作に習ってけんしんの九十九折りを駆け上がる気炎を上げた勝者が、

照射の敗者を浮き彫りにした殺意をほのめかす予告の引用に余韻の新聞記事がまるで未来からきたけんしんのようだ。

一九八四年（昭和五十九年）二月二十七日昼ごろ、

陸上自衛隊山口駐屯地にある第十七普通科連隊射撃場で、射撃訓練を受けていた六十人の隊員のうち、左端にいた二等陸士k（当時二十一歳）が振り向きざまに、持っていた六四式小銃を居並ぶ自衛官に向けて乱射した。結果、四人が重軽傷を負い、そのうち一人は翌日死亡した。

kは小銃を携帯したまま、ジープで逃走した。ただちに、自衛隊や山口県警察は厳戒態勢をとり、午後四時四十分に山口市内で身柄を拘束した。

「普段から悪口を言っていた同僚に対して快く思っ  
てなかった誰でもいいから撃つてやろうと思った。」  
動機に訓戒処分を受けた四ヶ月後に上官は自殺した。

深夜零時を過ぎても消えることもない明かりの下で心像に光りが差した献身の招聘は転写の磔獄門の幽鬼に十字を切った。

父と母と聖霊と御名の円周上において回り回る巡る巡り止めどない観覧車。

完。